

これが「スーパー無駄遣い」の実態です。

2010年11月10日
江戸川区 スーパー堤防・街
づくりを考える会



それでもスーパー堤防？

10月28日に行われた行政刷新会議でスーパー堤防は「スーパー無駄遣い」として廃止となりましたが、数字だけでなく、実際につくられたものを見て、どれだけ無意味なものをつくっていたのか、その無駄遣いぶりを具体的に知っていただきたいと思います。左側の航空写真はどれも国土交通省が実物の例として発表しているものですが、これらが「堤防」の体をなして

いないことは一目瞭然です。地図上では散在する点にしかありません。こんなものに巨費を投じているのです。

私たちはスーパー堤防の細切れを「スパコマ」と名付けました。

堤防はつながっていてこそ治水の効果を発揮するものです。つながるまで400年かかると言われ、見込みさえ立たないものの効果をしきりに宣伝しても実際につくられるものは「スパコマ」です。まさに「羊頭狗肉」です。あえて「スパコマ」と呼ぶことにしたのはスーパー堤防の一般論とは区別するためです。ではなぜ素人でも治水の役には立ちそうもないとわかるスパコマ建設に熱心なのでしょう。右の写真を見てく

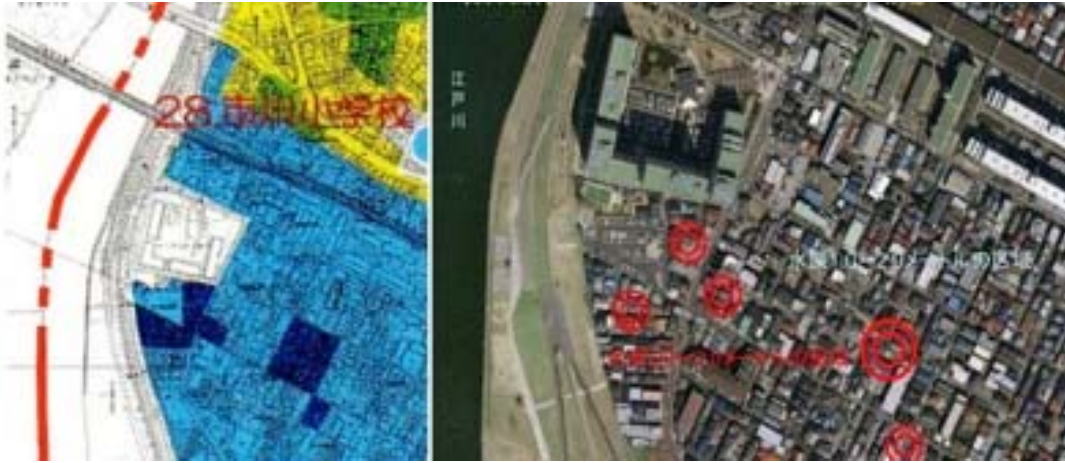


普通の堤防とスパコマの違い



ださい。「パークシティー市川」です。江戸川の左岸、JR市川駅から徒歩9分の場所にある総戸数815戸の高層分譲マンションで、スパコマの上に建っています。スーパー堤防建設とセットになっている「街づくり」の一つの結果がここにあります。ここは工場跡地に建てられましたが、対岸にある建設予定地の北小岩では公共事業という名目で住民6700人を追い出しての「街づくり」です。そこは京成線江戸川駅から0分、巨額の税金を使っただけの開発で巨額の利益を得るのはいったい誰なのでしょう。

スパコマはむしろ危険。



スパコマは左の図のように局部的に強化された堤防です。強さが一様である堤防の一部分だけ強くされると必然的に弱いところができます。破堤や越水はその弱い部分で起こりやすくなります。洪水であふれた水は右の図

のようにスパコマをよけるように流れます。そのためにスパコマの脇は洪水の流れが集中しやすく、そこに住む住民に新たな不安が生じることになります。

左側の図はパークシティー市川建設後につくられたハザードマップの一部を拡大したものです。右側の衛星写真と比べてください。特に窪地でもないのにスパコマ（パークシティー市川）のすぐ脇に水が集中すると予想されています。

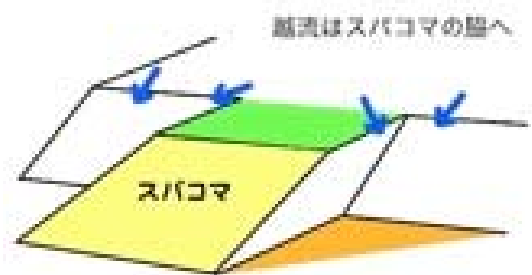
（左図の水色の部分は水深1 m～2 mの浸水、濃い青色の部分は水深2 m～3 mの浸水。右図の赤二重丸は左図の濃い青色で示された位置を表示。）

何を優先？ こんな「場所選び」はありません。

ごく一部ずつしかつけれないスーパー堤防だからこそ、治水上の必要性、緊急度をよく調べて、どこからつくりはじめるか決定すべきです。ところがスーパー堤防の建設用地に選ばれた北小岩についても、すでに建設された平井7丁目についても、それが行われてないようです。

北小岩の場合

- 1 江戸川区が公表している洪水ハザードマップでは区内でもっとも水害を受けにくい地区として表現されています。せっかくのハザードマップを無視した計画です。
- 2 既存の堤防は広くて緩い法(のり)面を持ち、規模も強度も区内第一級のものであります。（下の写真）
- 3 広い河川敷があり、洪水時には急激な水位の上昇を抑えて堤防を守ります。
- 4 スピードを出しすぎた車は曲がりきれずにカーブの外側のガードレールに衝突しますが、内側には衝突しません。北小岩はカーブの内側の滑走斜面側に位置し、濁流に攻撃されません。またもともと地盤がしっかりしている自然堤防の上に堤防があるために地震にも強く、北小岩地区から破堤する可能性は極めて低いと言えます。



- 5 実際、これまで破堤したことがなく、昔からの住民と歴史のある古い街が存在します。

「平井7丁目スーパー堤防」の場合



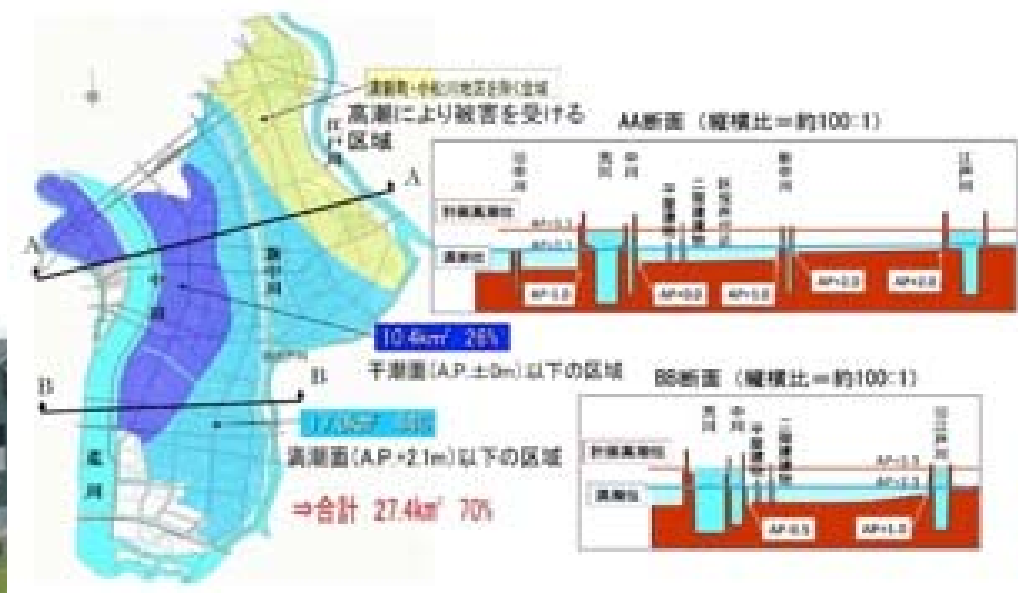
1. 昔の中川の流れを人為的に流れを変えられた荒川が横切っています。その部分につくられた堤防はどうしても他より弱くなります。そこを補強せず上流側の隣接部分にスーパー堤防を建設してしまいました。スパコマをよけた濁流が旧流路上の堤防を襲うことでしょう。皮肉なことにスパコマが旧流路を埋め立てた住宅地に洪水流を誘導する働きをされると考えられます。
2. 工事を始めてから「汚染土壌」の存在を知り、あわてて大幅な計画変更をし、余計なお金を使いました。候補地選びのための調査をせずに最初から建設用地を決めていた疑いがあります。
3. スーパー堤防の必要条件である極めて緩傾斜の裏法面がつかれない場所をあえて選び、左の写真のような垂直な裏法面の「スーパー堤防」を「完成」させました。前原大臣（当時）の視察時に見せないつもりだったことから、「確信犯」だったことがうかがえます。



スーパー堤防建設推進ならまず荒川からのはずが・・・

11月2日付けの「都政新報」は江戸川区の土木部長が「事業仕分けで命を仕分けられたようなものだ。絶えず海水が流れ込む危険と戦っている海拔ゼロメートル地帯の苦勞を全く理解して

図1-1 ゼロメートル都市・江戸川区の地勢特性



いない。」と憤ったと伝えています。果たして憤る資格があるのでしょうか。土木部長は、2009年の12月

11日の群馬県議会、ハッ場ダム対策特別委員会で「(荒川の)江戸川区側は切れてもいいように造られて」いることを「運命」とし、それを敢えて「甘受」と言い切っています。同一人物の発言とは思えません。

右側の図は江戸川区が作成した資料にあるものです。一見して西側の荒川と東側の江戸川のどちらが水害に対して深刻な状態であるかわかります。より強固な堤防が必要なのは荒川沿いであるのにもかかわらず、既に十分な規模と強度を持った堤防のある江戸川沿いから手をつけるというのは全く矛盾しています。なるほど海拔ゼロメートル地帯の苦勞を「理解」していながら、それを「甘受」しています。荒川沿いの住民こそ命を仕分けられたようなものです。

税金を本当に区民の命と暮らしを守る治水対策に使って欲しいのです。

ダムや堤防強化で川をコントロールしようとするを「河道内制御」と言います。今や時代遅れの考え方となりました。つまり川を力づくで封じ込めるやり方で、結果として堤防はどんどん高く、強くなり、川の水位は上昇してしまいました。

スーパー堤防も「河道内制御」の立場に立っています。本流の水位が高くなると困るのは支流です。地域の排水の役割を担う中小河川の支流は本流に流すことで成り立ちますが、本流のほうが水位が高くなれば逆流がおこります。そこで仕方なく合流点に水門を設けて閉めます。逆流は防げましたが支流の流域の水は行き場がなくなり支流は氾濫します。支流は本流の堤防の内側にありますから、これが「内水氾濫」です。この内水の

処理はポンプで強制的に汲み上

げて本流に捨てられることが多く、下流ほど水が集まり内水氾濫がおこりやすくなります。江戸川区は最下流に位置しますから深刻な問題です。しかも海より低いゼロメートル地帯が7割を占め、人為的に排水しなければならぬ宿命を背負っています。**200年に1度の大洪水**に対応したスーパー堤防の整備よりも内水対策のほうがはるかに緊急の課題です。江戸川区の土木部長でさえ先述した群馬県議会の委員会で「東京都下水道局は50ミリメートルまでの内水の排除しかない。国交省は外水の排除といって一級河川に入った水の排除の責任しかありません。ですから洪水になった時に、江東デルタを襲った水を誰が出してくれるのでしょうか。」と問題点を指摘しています。最近では時間雨量100ミリメートルを超えるゲリラが豪雨も珍しくなくなり、雨水だけでも下水道の排水能力を超えてしまいます。それに中小河川から氾濫した水が加われば被害は甚大です。そしてゼロメートル地帯にたまった水は人為的にくみだすしかありません。ところがそこで頼りにすべきポンプの実態は左の江戸川区の資料にあるとおりです。絶対数も足りなければまったくポンプの無いところもある、しかも水に浸かれば止まってしまうものが多いのです。さらに中小河川に至っては堤防も頼りないものばかりです。こうした状況で浸水が避けられないということであれば、浸水したなかでも住民の命と安全が守れ、何とか生活できるような条件づくりを進めていくことが何よりも先にすべきことでしょう。



スパコマ建設の強行はコミュニティーも壊します。

スーパー堤防建設が大幅に遅れた理由は莫大な建設費を必要とするからだけではありません。堤防の拡幅のために住民を立ち退かせるという本質的な欠陥があるからです。立ち退かせるために必ず住民の間に意見の対立を生じさせ、仲の良かったコミュニティーをも壊します。大切なコミュニティーと慣れ親しんだ暮らしの場を失いたくないための私たちのような住民の反対運動がおこるのは当然のことです。「スーパー無駄遣い」どころか私たちの幸せを壊すとんでもない事業であることを改めてご理解ください。私たちはこの事業が復活することなく、完全に白紙撤回されることを強く望みます。